

共生に思う

神谷正義

多くの大学では退官にあたって最終講義が開催されることがある。縁あって20年間、専任教員としてお世話になった東海学園大学を平成29年3月末日退官した。最終講義の意味合いをもって「共生」について日頃から考えていたことの一部を纏めておきたい。

I. 縁

在家出身の私は信仰深い母の勧めもあって、愛知県岡崎市にある、徳本行者ゆかりの浄土宗（捨世派）荒井山九品院の小僧として、当時、浄土宗総本山知恩院布教師会会長をしていた師匠伊藤超山の下で高校を出るまで過ごした。師匠の勧めもあって佛教大学へと進み佛教学を学ぶ機会を得た。と同時に、住み込みの知恩院の夜間警備員として勤めた。

3年次に指導教授となった香川孝雄教授との出会いで将来に道筋が開かれた。原典購読では「シンガロバーダ・スッタタ（六方禮経）」が取り上げられ仏陀の教えに強い関心を持つようになると同時に、卒業論文では引き続き「六方禮経」を取り扱おうと思っていたが、1年先輩の同じゼミ生が取り扱うとのことで、「六方禮経」を諦め、香川先生の専門分野でもあった、仏性・如来蔵思想をすることにした。その中でも世親造真諦訳とされる「仏性論」を取り上げた。

当時、仏性・如来蔵思想に関する研究が盛んであった。東京大学の高崎直道先生はじめ、恩師の香川先生、同じく佛教大学にいた水谷幸正先生（当時事務局長を兼務しておられ、後に学長、理事長になる）、更には小川一乗先生、中村瑞隆先生などが成果を公にされていた。その中でも、特に関心を持った論文に、京都大学の服部正明先生の「仏性論について」があった。服部先生の所論を確かめるべく、仏性論の内容に深い関係を持つと思われる、究竟一乘宝性論、大乘法界無差別論、無上依経などとの対照を行い、原稿用紙で400枚ほどの卒業論文を作成し

た。その論文審査が香川先生と水谷先生であった。二人の恩師の勧めもあって大学院へと進んだ。

その縁もあって、水谷先生から知恩院の夜警を辞めて佛教大学に来ないかとお誘いを受け、大学の学生寮の寮監になり、修士課程を終えた。修士論文は、「如来蔵思想について」である。修士課程を終えた時に香川先生の仲人で、香川先生の自坊、大阪の蓮生寺の仏前で、京都の四条寺町を下った浄土宗2祖聖光聖人所縁の聖光寺の住職で師匠の弟弟子である、小林忍海師の戒師の下で結婚式を挙げた。生活の為もあり、引き続き大学の職員として勤めさせて頂くことになり、それ以降、水谷先生には何かにつけ御指導を受けることになった。

博士課程においては毎年100枚の報告論文が課されていた。如来蔵思想を研究していく上で心性本淨説や部派論書へと研究の幅を広げていき、仏教哲学に関心を深めていった。その時に椎尾弁匡師の『仏教哲学』を手にしたこともあってか、博士課程を単位取得満期退学する頃には、椎尾弁匡著作集10巻を購入していたが、共生についての著述には眼を通すことはなかった。

博士課程を終え、大学事務局の仕事しながら20年余り過ごした。その間、水谷先生の指導を受けながら教務課長や学習指導室長、講師などをし、兼ねて大学設置（大学院、学部、学科設置や定員増など）の仕事も17年間させて頂いた。

その縁もあって当時水谷先生と親交の厚かった東海学園の学園長・理事長であった堀田岳成先生の処へ伺うことがあった。所要は東海学園が大学を設置するにあたって堀田先生から相談があり、水谷先生とともに訪れることになった。確か平成2年頃のことだったと記憶している。その後、平成5年大学設置の申請がなされ平成7年、東海学園大学が認可され経営学部1学部でスタートが切られた。その際、水谷先生は東海学園大学の教授として「佛教概論」を担当されていたが、繁茂な職務の中での講義担当が難しくなり、代講として私が引き継ぐことになり、佛教大学から毎週東海学園大学に足を運ぶことになった。これも縁であるし、椎尾弁匡全集を手にした大学院生の時から、東海学園大学に縁が用意されていたのかも知れないと今では思っている。仏の計らいであったのかもしれない。

そして平成9年4月、東海学園女子短期大学におられた服部正穂教授の退官の後任として奉職することになった。それから20年を迎えることを期に定年一年

前であり、共生文化研究所長の任期半ばであったが東海学園大学を去る決断をした。堀田先生を訪れてからでは27年縁を持たせて頂いた思い入れの深い大学であった。

II. 共生への関心

東海学園に奉職する2年前、平成7年1月11日、阪神淡路大震災が起こった。多くの人が被災し亡くなった。私自身被災は受けなかったが衝撃は強かった。そんな時に、小田実氏の『「殺すな」と「共生」 - 大震災とともに考える -』（岩波ジュニア新書252）が刊行された。これが私が共生に強く関心を抱く直接的な第一歩であった。小田氏は次のように述べていた。

「共生」はまず対等、平等、自由な人間関係であって…異質の価値の「共生」ということ…「共生」の形成、維持にとって、大事なことは、おたがい違った人間、違った価値観をもった人間であることを認めあって生きることです。…そのあたりまえのことをあたりまえのこととするのが、「共生」の始まりです。…違いは大事です。人間おたがいのあいだはちがいがあることによって人間である。－と逆に言うこともできます。しかし、ちがいは優劣、上下関係を意味しません。ちがいが優劣、上下関係を形成、維持するとき、差別が発生します。ただの区別が差別となる人間の歴史は、その区別が差別となった歴史によって、もう十分に苦しんで来ました。…日本国は残念なことに、非常に鈍感な社会だと思わざるをえないのです。…（p152-154）

「市民は」はあくまで「個人」です。個人の基本は、自分のことは自分で決める。それが人間にとってもっとも大事なことのひとつ、自由をかたちづくる。それを制度として保証するものが基本的人権です。自分のことを自分で決めるひとりの個人はひとりの「われ」です。その「われ」が結びついて「われわれ」となるとき、社会が形成されます。結びつきの関係の基本は、対等、平等です。本質的に自由な「われ」と「われ」とが結びついた社会－それが市民社会です。「われ」と「われ」の関係は等記号で結ばれています。それゆえ、これは決して「われら」に収斂されてしまうことのない「われ＝われ」です。この「われ＝われ」はこれもまた本質的に外にむかって開かれている

「われ=われ=われ=われ・・・」おたがいの対等、平等、自由な関係の根底にあるのは、おたがいの「市民奉仕活動」、つまり、おたがいがおたがいを助けること、助け合うことです。(183-184)

この本を手にした時に、「共生」ということに強い関心を持った。そして手にしていた椎尾弁匡師の著作に目を通すようになった。小田氏と椎尾師の論調には余りの違いに驚きを隠せなかった。それが椎尾師の共生思想に関心をもつきっかけともなった。その後、東海学園への奉職を機に椎尾師の共生思想等について、また椎尾師を学祖と仰ぐ東海学園の共生についても考えるようになり、機会を得て以下のような共生に関する発表をしてきた。

1. 21世紀の指導原理としての共生=仏教の立場から～平成11年1月 京都市
2. 共生思想考(2)～他者との関係～平成11年9月 浄土宗総合学術大会(大正大学)
3. 共生思想考(1) 平成12年3月 印度学佛教学研究48-2
4. 共生思想考(3) 平成12年6月 東海印度学仏教学会(名古屋大学)
5. 法然上人における共生の思想 平成13年3月
香川孝雄博士古稀記念論集『佛教学浄土学研究』所収
6. 椎尾弁匡師の共生思想 平成13年3月 印度学佛教学研究49-1
7. 法然上人における平等の問題～共生とのかかわりから～平成14年3月
印度学佛教学研究50-2
8. 法然浄土教の社会性 平成14年6月 東海印度学仏教学会(東海学園大学)
9. 共生思想考(4) 平成14年9月 浄土宗総合学術大会(佛教大学)
10. 仏教と共生 平成15年1月 京都市
11. 「いのち」を考える 平成15年4月 京都市
12. 「自他の平等」 平成15年8月 大阪市
13. 椎尾共生論の問題点 平成15年9月 日本印度学仏教学会(佛教大学)
14. 法然法語における共生的表現 平成15年9月 浄土宗総合学術大会(大正大学)
15. 共生における平等・個性・自由・平和 平成18年5月 天理市

16. 浄土宗の共生論 平成 18 年 9 月 浄土宗総合学術大会（佛教大学）
17. 浄土教共生試論 平成 18 年 10 月
関山和夫博士喜寿記念論集『仏教・文学・芸能』所収
18. 仏教と環境 平成 18 年 11 月 京都大山崎町
19. 椎尾共生論における「いのち」について 平成 19 年 9 月 日本宗教学会（立正大学）
20. これからの人類に果たす仏教の役割 平成 19 年 10 月 比叡山延暦寺会館
21. 初期の仏教經典にみられる人間の生き方～スッタニパータを中心として～
平成 20 年 2 月 大阪市
22. 椎尾弁匡師の仏教論～「人間の宗教」を中心として～ 平成 20 年 7 月
東海印度学仏教学会（名古屋大学）
23. 共生浄土について 平成 20 年 9 月 日本宗教学会（筑波大学）
24. いのちについて～生と死を考える～ 平成 21 年 2 月 京都市
25. 椎尾共生論の形成～共生主張の起点～
平成 21 年 9 月 浄土宗総合学術大会（大正大学）
26. 椎尾弁匡師と共生 平成 23 年 10 月 増上寺会館
27. 法然教学と共生 平成 24 年 12 月
藤本浄彦先生古稀記念論文集刊行会編『法然仏教の諸相』所収
28. いのちについて～共生の観点から～ 平成 27 年 2 月 京都市
29. 人間形成と行為、働くことの意味～慈悲と共生～
平成 28 年 2 月 京都MKグループ研修会
30. 働くということ～椎尾師の共生論との関連から～
平成 28 年 9 月 東海学園大学SD研修会
31. 共生の定義 平成 28 年 3 月 東海学園大学共生文化研究所『共生文化』創刊号

Ⅲ. 共生に不可欠なもの

A. 存在価値の平等

共生論には人間観が不可欠である。その人間観の如何によって共生論の中身が

大きく変わってくる。様々な共生についての所論が見られる中、現代の共生論の主要な論点が、牧男牧男先生の最近の著作『ブッディスト・エコロジー～共生・環境・いのちの思想～』に纏められている。

その最初に椎尾師の共生論の意義と特徴が書かれている。椎尾師の共生論については様々な評価がある。私も「椎尾共生論の問題点」として論じたことがあるので、更に機会を得て論じたいことがある。

先にあげた小田氏の所論である、違いが差別にならない、違いが承認される社会、価値観の多様性を前提とする、優劣・上下関係ではない人間関係であり、対等・自由・平等を人間関係の基礎に据えることをまずは上げなければならない。

その意味でも金子みすずの詩、「わたしと小鳥と鈴と」(『全集Ⅲ』)には大きな意義がある。

私は両手を広げても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のやうに、
地面を早く走れない。

私がからだをゆすっても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんの唄はしらないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

違いがあることでこの世の中が成り立っている。金子みすずの眼差しは違いを正しく認めてその存在価値を平等に受け止めているところにある。また金子みすずの詩に「大漁」(『全集Ⅰ』)がある。

朝焼け小焼だ 大漁だ 大羽鱈の大漁だ。
濱は祭りの やうだけど 海のなかでは 何萬の 鱈のとむらひ するだろう。

ここでの金子みすずの眼差しは、喜び祝う裏で命を失っていく存在への深い洞察である。満たされた者の陰で貧しい生活を余儀なくされている者への我々の心のあり方の余りに鈍感な神経を鋭く指摘していると言ってよい。二極化が進む現代を先取りした指摘であると言ってもよい。一部の富める者と多くの貧困者が誕生してきている。こどもの貧困率が16.6%に達すると言われる現代を予言したかのようなのである。そうであればある程に、共生を論じる際には、みすずが目を向けた、亡くなった鯉の存在と同じ立場への視点は欠かせない。

参考文献：矢崎節夫「あなたはあなたでいいの　うれしい金子みすずさんのま
なざし（『龍谷大学 人間・科学・宗教ORC 11 「地球と人間のつ
ながり－仏教の共生論－」所収）

違いが違いとして認めあえることの重要性は、共に生きていく社会において、また宗教の世界において最も重要な事項である。愛知県の今年度の人権啓発ポスターには

わたしの「ふつう」と、あなたの「ふつう」はちがう。

それを、わたしたちの「ふつう」にしよう。

とある。このポスターに哲学者の鷲田清一氏は次のようなコメントを寄せている。

普通教育、普通選挙といわれるように、「普通」はかつて、身分による限定を外すものとして、とてもまぶしいことばだった。それがいつ頃からか、等し並みのもの、これといった特徴のない凡庸なものという意味へと裏返ってしまった。この標語は、「普通」を、一人ひとりの存在を輝かせることばとして蘇らせようとしている。

(2017. 2.2 朝日新聞：折々のことば)

一般に我々は「普通」を「異常」と対比して用いることがある。現代社会においてはややもすると、「普通」とは現代社会の価値観、経済至上主義の価値観の前において、利益追求に有効なものには価値を認め、それに反する非効率的な存在には価値を認めないものとして扱われ、「普通」ではないものとして、心身に障がいを持つ人、子供、老人をはじめ社会的弱者が生まれて来ているのも現実である。とりわけ、光が当たらない存在への優しい眼差しは特に宗教家（仏教者）が持た

なければならないものであろう。

あらゆる存在が「欠くことのできない存在」であることを縁起の理法が教えている。自己の存在は連綿と繋がるいのちの繋がりの中で生じ今現存しているし、また自己の存在は未来への欠くことのできない存在となる。と同時に、一人の存在は機械の部品のように交換可能な存在ではなく、代替できない存在である。勿論、一人の存在は他の存在と異なった点を持っている。それぞれ持っている能力・機能は異なるが、それが差別になるという場合は、一方の側に絶対的な価値観を置いた一元論的な価値観に立っている。

そうした価値観に支えられた社会は小田氏が指摘するように、差別社会である。差別を固定し、増幅し、不平等で自由のない社会を強固なものにしていく。経済格差が学歴にも影響を与える。学ぶ権利が奪われていく。先にあげたように子供の貧困率が6人に1人を占めるほどになってきている。しかし、少数者という立場におかれて救いの手はなかなか差し伸べられていないのが現実であるし、宗教家や団体の働きかけも弱いのが事実である。マジョリティーとマイノリティーとの関係をどう見るかに繋がる問題である。

B. 対等・平等ということ…役割と責任の問題

個と箇、個と集団、集団と集団の関係には自ずと上下関係が出来て当然と我々は考える。会社組織においては社長と社員、同じ部局では部長と課員といった関係は上司と部下という具合である。政党であれば党首に党員という立場、大学であれば理事長と学長と教員と事務職員、教員と学生の関係等も範疇に入るかもしれない。ただ国と国との関係では上下関係とは表現できないが、経済的・軍事的な力関係が働き、表立って上下関係とは言えないが、かなりその関係は上下関係に等しい面も拭い切れない。

組織運営においては社長と社員では「役割と責任」に違いがあるだけである。社長は社長として会社の経営と人事の責任があり、その役割を適切に行うことにおいて、相当の賃金を得る。それに対して社員の役割はある意味、業務処理型・製造担当であって、経営権・人事権を与えられていない。しかし、経営者の経営不適切で企業の存続が危ぶまれた時には、経営者たちの多くは「合理化」という

名目で多くの社員のリストラを行って経営の建て直しを図るのが当たり前のように行われるのが現実の社会ではないだろうか。こうした在り方は果たして共生する組織と言えるのだろうか。

組織にあつての個と集団、他の社員と別の社員との関係を考える場合は、華嚴経五教章に総相、別相、同相、異相、成相、壊相の六相を挙げることができる。竹村牧男氏はいう。それぞれについて解説し、次のように現代的に訳している。

個人はすべて全体と同じ重さを持っている。

個人はけっして全体に解消されるべきでない。

個人は他者とともに全体に関わる点で互いに共通している。

個人は他者と異なる個性を発揮するのは当然である。

個人は他者と協力して一つの全体を形成する。

個人はどこまでも自己自身を保持すべきである。

ここでは垂木や他の柱、鴨居のそれぞれが、家全体を造り上げている。家という全体と柱や垂木という個の存在との関係、さらには各存在が家に吸収されていくものでもないことを喩えとして挙げている。それぞれの存在はそれぞれの役割を果たしていくことで、一つのを造り上げている。したがって、この華嚴経の教えは、それぞれの存在が上下関係としてではなく、いみじくも「役割と責任」という私の提言と共通している。

また椎尾師は牧村氏も指摘するように、「共生要目十綱」の第四番目に

四、事生きる。一切の事を生かすには虚礼陋習の打破、当務充実、業務分配が必要である。

と述べているし、また共生運動では精力的に全国更には海外まで出向いて共生覚醒運動を展開し、特にマルクス主義に対して批判的であつて、経営者や労働者に「分配や協同」の重要性を説いている。これも華嚴経の立場に立ったものかもしれない。

このことを竹村氏は、「個性を発揮しつつ連帯していくということにつながるであろう」としている。「業務分配」は、それぞれが異なった役割を誠実に果たす、「当務充実」は与えられた業務を誠実に果たす、ということであろう。そこには上下関係といった概念は見られない。椎尾師は

各人業務に生きてその分担を全うし、互いに和合協力信用して進歩発展する。

…覚醒進歩の仏国浄土－共生世界の実現－となる

と宣言している。実現されるべき共生世界は、上下関係ではなく、和合、協同、信用しあうことにおいて成り立つとしているのである。

椎尾師が言う「業務」、「分担・協調」は上の説明だけでは捉えきれないものがある。「業務＝仕事」を以下のように述べている。

業務、すなわち仕事は私の生命であり、国家の生命であり、社会の生命であり、全人類の生命であって、それはとりも直さず天地の大生命である。…業務は共生を満足するものであり、これは敬上慈下すなわち供養の業務である。自分の身心の能力をことごとくその仕事に打ち込むのである。この力が社会全体を向上させていく力であって、どうしても社会全体へ供養する精進努力の業務でなければならない。

更に続けて

業務は社会生命であると同時に、知恩報恩であって、受けること少なくして捧げること多からしむることである。天地の力を受けて、私が受けたより以上に現わして行けるのは業務である。業務を通じて初めて完全に奉仕することができる。現在の社会がより以上に進むためには業務の力以外に何ものもない。

と言い切っている。ここで問題となるのは、アンダーラインを引いた知恩報恩に関する見解である。共生社会の実現にとって不可欠な「業務」が各人の地位や役割、言うならば「分」に応じて与えられた仕事の「分担」と相互の「協調」とがあり、その仕事を通して「少し受けて多く捧げる」という「無私奉公」の知恩報恩の精神を強調する。知恩報恩こそが共生社会を実現するものであり、分に従って全力を尽くすべきである。知恩報恩の行とは社会生活の本務をつくすと述べる。この無私奉公の利他的と思われる具体的な行為として現れ出てくるのが、感謝、報恩、忠孝、分担と協調、和合協力の「分」の論理であった。この無私奉公の倫理が、利潤の追求を第一とする企業の経営者や国益の追求を第一とする国家権力にとって、利用価値のあるものであったことは言うまでもない。この共生の論理、共生としての倫理観が、第二次世界大戦を牽引する役割を担うと同時に椎

尾師の共生論の最大の欠点とも言える。この椎尾師の「業務」「分担と協調」の論理には、華嚴経が説く六相の思想は見られない。どこまでも上下関係が前提されていて、支配の構造を読み取ることができよう。

それに比して関心を向けるべきは吉津宜英氏の「不共生と共生、そして非共生」(『日本仏教会年報64号所収』や『<やさしさ>の仏教』での提示である。蓮根型の自己論を提示して

非自己と総称する事事物物に対して、「優しい」認識を持ちうるのではないか。そしてそれは非自己と対峙し、非自己を位置づける自己、あるいは自己独自の未知性や無知性に対しても出来るだけ認識を深め、出来るだけ「ありのままの自分」を大切にする姿勢を発揮できる。

蓮根型の自己論のキーワードは「対峙」である。自己は非自己と対峙し、従って自分自身は他の隣人とも、いかなる共同体とも、いかなる真理性とも、いかなる価値観とも対峙する。蓮根型の自己論では自己の既知性は、未知なる自己とも、無知なる自己ともけじめを付けて対峙する。…開放型である蓮根型においては、自己がどんなものにも水平に、対等に、対峙し、自他の区別だけは厳重にしなくては、自分が何を為すかが不明となり、無責任な八方美人型な偽善的な自己論に成り下がる。

と述べている下線部に注目したい。

C. 人間観

①常にある何かが欠如した存在と布施の実践

法然上人は自らを「三学非器」と認識して聖光上人に次のように語っている。

およそ佛教おほしといへども 詮ずるところ戒定慧の三学をばすぎず、…しかるにわがこの身は、戒行において一戒をもたもてず、禪定において一もこれをえず、智慧において断惑證果の正智を得ず、…凡夫の心は物にしたがひてうつりやすし、たとふるにさるのごとし、ま事に散乱してうごきやすく、一心しづまりがたし。…かなしきかな、いかがせん。ここにわがごときは、すでに戒定慧の三学のうつは物に非ず

…(昭法全 459 - 460)

自らの実際を凝視する時、人間は常に何か欠如した存在と言わざるを得ない。特に優れた能力を持っている人もいるが、多くの人間はある能力に欠けている。法然上人は仏道修行における三学において、その器ではないという。

実際に自己の能力の優れた点と劣った点を5段階評価でそれぞれ16項目を挙げて円を作成してみれば、優れている円も劣っている円もどちらも凹凸があり、完全な2つの円を描くことはできない。前輪に優れた円の車輪を、劣った円の車輪を後輪とした自転車の上に自らは乗って人生を送っていることがわかる。そのような凹凸の車輪の自転車を運転して人生という現在と未来へ進んではいけないことはこの例からも容易に理解が出来る。

しかし、現実の生においてはその不足部分をどこの誰かは分からないが補填してくれているから日々を送ることが出来ている。これが現実である。自己完結できないのが人間であり存在の本質である。

こうした現実を確認することで、生きるということにおいて自己以外の他者の多様な能力が無償で提供されていることが理解できる。それぞれが持ち得ている能力を無償で惜しみなく提供するという生き方が、共生には不可欠な要素であると言える。それが菩薩行としての布施波羅蜜行なのではないだろうか。布施には三輪清浄という態度が求められる。つまり布施をする人と受ける人と布施の中身にとらわれないという姿勢である。この布施は無償の能力の提供ということである。

契約社会、経済優先社会にあっては無償の提供はあり得ない。全てが契約に基づく give & take であると言ってよい。しかし、その結果において既に述べたように貧富の格差が増大してきている。個人が持っている能力を生かす場すら奪われていくのが現実である。一旦、社会の底辺におちたら這い上がることもできないのが現代社会である。

しかし、ここに一つの報告がある。アメリカの原住民だった貧しい彼らの生活の中で支え合い、共生の姿が描かれている。それは give & give によって貧しさの中でも生きる力強さをレポートしている阿部珠理氏の『ともいきの思想～自然と生きるアメリカ先住民の「聖なる言葉」～』（小学館 101 新書）がある。少し長くなるが引用する。

伝統的なラコタ社会では、ケチは泥棒より悪いとよく言われた。ラコタの四つの美德の一つである「寛大」は、精神の寛大さだけでなく、物惜しみしない気前のよさを含んでいる。ちなみに残りの三つの徳は、「敬意」「知恵」「勇氣」である。気まへの良さは、日常生活の中でもっとも発揮しやすい。つまり他人にも分かりやすい。…かつて狩猟生活をしていたときは、持ち帰った獲物をハンターが誰に与えるかで、その人の徳分がはかられた。もちろん最後には家族に行くのだが、その前に、父や夫が亡くなってハンターがいない家族や老夫婦、その日獲物を射止めることのできなかったハンターの家族に、気持ちよく分け与えるかどうかで、人間性が判断された。ことに娘の夫を選ぶ父親の目は、非常に厳しかったという。娘の将来を託す判断を左右したのが、より貧しい人に気持ちよくものをあげられるかどうかだった。(p90)

ラコタではおおむね感謝の念から、与え尽くしが行われる。病気の平癒、息子の戦場からの無事な帰還、故人が生前お世話になったことの御礼などが、ギブ・アウェイを行う理由だ。…ギブ・アウェイでは、贈る方も、もらう方も、実に淡々としている。素晴らしいスターキルトをもらっても、白人のようにオーバーな喜び方はしない。第一、ギフトをもらって「サンキュー」とすら言わない。何気もなく指し出し、何気もなく受け取る。その際、贈り手ともらい手がただ握手を交わすだけだ。…(長老の言葉) だいたい、やつら(白人)はものを永久に自分のものだ勘違いしている。他人にやった後までも、自分がやったものと考えておる。ものは人のもとに必要なだけ留まっているだけじゃ。他に用ができれば、他のところへ行くのじゃ。ギブ・アウェイでもらったギフトは、自分のもとを離れるとき、本当の贈りものになるんじゃよ(p95)

give & teke では見返りが求められるし、更には利潤を求める。しかし、ラコタでは長老が言うように give & give による物へのとらわれのない価値観、物が豊富にあることが幸せという価値観が全くない。所有欲をなくしていく、所有への執着がない心が自由を獲得するという立場は仏教の無我観に通じるし布施波羅蜜行に通じている。

惜しみなく自ら持ち得ている能力(物を含む)を提供していく、それによって

弱者（先の老夫婦やハンターをなくした家族など）がより良く生きていける。弱者が生きられる社会こそが共生社会の原点ではないだろうか。物・金に絶対的な価値を置かない社会こそが共生社会であることをいみじくもラコタの社会が証明している。お互いに欠けたところを補い合うことで互いが支え合あい、生きていく、相互補完の考えが共生にはなければならない。

②機根を問い現実を凝視する

法然上人の自己認識に三学非器のほかにもう一つある。自らを「罪悪生死の凡夫」であるという自覚である。法然上人と高野の明遍僧都との問答がある。

明遍問いたてまつりての給はく、末代悪世のわれらかやうなる在濁の凡夫、いかにしてか生死をはなれ候へき。

上人答ての給はく、南無阿弥陀仏と申して、極楽を期するはかりこそ、しへつべき事と存して候へ。

僧都のいはく、それはかたのように、さ候へきかと存して候。それにとりて、決定せん料に申つるに候。それに念仏は申候へとも、心のちるをはいか、し候へき。

上人答ていはく、それは源空もちからおよひ候はず。

僧都のいはく、さてそれをはいか、し候へき。

上人のいはく、ちれとも名を称すれば、仏願力に乗して、往生すへしとこそ心えて候へ。た、詮するところ、おほらかに念仏を申候か第一の事にて候也。

僧都のいはく、かう候、これうけ給はりつる候と。

上人、又僧都退出後、当座のひしりたちにかたりての給はく、欲界散地にむまれたる物は、みな散心あり。たとへは人界の生をうけたる物の、目鼻のあるかことし。散心をすて、往生せんといはん事、そのことはりしかるへからす。散心なから念仏申す物か往生すればこそ、めでたき本願にてあれ。（昭法全 692-693）

念仏をしながらも雑念が起きるのをどうしたらよいかという明遍の問いに対して、法然上人は雑念が起きても念仏をすれば救われると答える。その後、弟子に対して、雑念を払えということは生まれながらにして持っている目鼻を無くせと

いうのと同じである、と論している。

こうした深い自己洞察が共生には不可欠である。互いが愚なる存在として対峙しあっていくところに謙虚な姿勢が出てくる。互いを尊重しあい認めあっていく姿勢が出てくる。自ら不断の精進を重ねながらも常に謙虚である態度、自らを凝視してありのままの人間としての現実を認めたくえで対峙していく態度が求められている。

更に、法然上人は「一枚起請文」に次の言葉を残している。

念仏を信ぜん人はたと一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智のともがらに同じうして智者のふるまいをせずしてた、一向に念仏すべし

愚鈍の身、無智の輩であることを根底においた生き方が救われる生き方であると論ず。それは同時に「分け隔てない人間関係」をつくることに繋がっていく。法然上人は貴賤性別を問わず念仏の教えを懇ろに説いていく。時代の持つ悩みに向かって揺るぎない平等の態度で接していく。

法然上人の眼差しは、常に最下層の人間、罪惡生死の凡夫に向けられている。浄土宗を開くのは凡夫の浄土往生を説かんがためでもあると宣言している。『選択本願念仏集』第三章に

問うて曰く、普く諸願に約するに粗惡を選捨し善妙を選取すること、その理然るべし。何が故ぞ第十八の願に一切の諸行を選捨し、ただ偏に念仏の一行を選取して往生の本願とするや。答えて曰く、聖意測りがたし。輒く解すること能わず。然りといえども、今試みに二義を以てこれを解せば、一には勝劣の義、二には難易の義なり。…

もしそれ造像起塔を以て、本願としたまわば、貧窮困乏の類は定んで往生の望を絶たん。然るに富貴の者は少なく、貧賤の者ははなはだ多し。もし智慧高才を以て本願としたまわば、愚鈍下智の者は定んで往生の望を絶たん。然るに知恵ある者は少なく、愚痴なる者ははなはだ多し。もし多聞多見を以て本願としたまわば、少聞少見の輩は定んで往生の望を絶たん。然るに多聞の者は少なく、少聞の者ははなはだ多し。もし持戒持律を以て本願としたまわば、破戒無戒の人は定んで往生の望を絶たん。然るに持戒の者は少なく、破

戒の者ははなはだ多し。…

然ればすなわち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催され、普く一切を摂せんが為に、造像起塔等の諸行を以て、往生の本願としたまわず、ただ称名念仏の一行を以て、その本願としたまえる。(元漢文)

この第三章の言説は、阿弥陀仏の本願を現世における最下層の人間において理解し受け止めていることは単に未来往生の平等を説くだけでない。現実の世界の中での不平等のあり方を強く意識したからに他ならない。人間の根源的な機根を鋭く見つめ、その上で、平等の救済を目指している。平等は共生にとって不可欠なものである。その平等は現実の矛盾の中で苦しみ悩んでいる人間を根底におかない限り実現しない。一部の恵まれた人を対象とした共生はあり得ない。経済格差、貧富の差が拡大していく中であればこそ、こうした観点を抜きにして共生は語れない。

D. 権力との距離

常に現実社会の最下層に目を向けていくには権力と一定の距離を置く必要がある。人間は集団を作り、その集団・組織は権力構造を持つ。権力は富の集中・増幅を図り、その支配体制を強固にしようとする。体制の揺らぎ、破壊が時代の裂け目となって新たな時代、新たな権力を生み出す。一時代の権力者は大多数の協賛を得て、或いは武力によって成立するが、それに与しない者や利害・価値観の異なる者は反権力者として存在する。あるいは権力の特権に預かれない者を生み出す。その権力の交代が時代の変化として現れてくる。権力の交代が歴史として記述される。

時代の裂け目に生まれた法然上人は父の非業の最期と出会う。それだからこそ父の遺言が身に染みたことであろう。母と別れて伯父観覚のもとへ逃れていく。そして比叡に上り勉学に修行に邁進する。天台の座主にと囑望されるも黒谷の別所、叡空のもとへと身を寄せていく。聖なる地、比叡山も世俗の権力にまみれていた。

12年を経て24歳の時、保元の乱といった権力闘争の最中に、嵯峨清涼寺に参籠する。仏道の成就を願ったであろう。そこで見たものは真摯に仏に助けを求め

る大衆の姿だけではなかったはずである。生活に困窮した今日を生きることも頼りない者たちの多くの姿をまざまざと見たことであろうし、生死の儚さを見せつけられたことであろう。そうした人々を救える教えを必死になって求める大きな要因があったと推測できる。

権力に潰された身としての父との死別、母との生き別れ、権力とほど遠い黒谷への隠遁、まざまざと見せつけられ身に沁み込んだ権力の恐ろしさを法然は実感していたことであろう。だから権力の象徴としての座主という地位も捨て黒谷別所へと赴いたと言える。別所は聖たちの場であるとともに、社会の階層からはじき出された人達の集まる場でもあった。そうした彼らを常に法然上人は目の当たりにしていた。

法然上人は自らの救われる道だけでなく、こうした社会の階層からもはみ出た、明日をも知れないで苦しみぬかざるを得ない人達の救いの道を求めていった。そこで辿り着いたのが口称念仏、阿弥陀仏の本願力による万人の平等往生の教えであった。それだからこそ次第に権力と一体化した既成教団からも、時の権力者からも弾圧されていくようになる。

念仏停止の動きは教義面への批判のみではない。既成の教団は時の権力と一体化している。権力の承認によって存否が決定されるとする。解脱房貞慶が奏したとされる「興福寺奏状」には九つの過失を挙げる。その第一条が「新宗をたつる失」である。

もし古より相承して今にはとどまらずとならば、誰か聖哲に逢ひて面に口扱を受け、幾の内証を以て教誡指導するや、たとひ功あり徳ありと雖ども、すべからく公家に奏して以て勅許を待つべし、私に一宗を号すること、甚だ以て不当なり。

正当な根拠も示すこともなく、勅許を得ないで新たな宗を立てたことが誤りであるとする。法然上人は正当な流れを持つと主張するも、既成教団がいう勅許は得ていない。勅許は国家権力によってなされる。それを受けずに法然上人は善導浄土教の流れをうける正当な一宗であると『選択本願念仏集』で表明する。法然上人の念仏の教えは貴賤を問わず瞬く間に都邑に拡がっていく。多くの民衆の心の支えとして信受され生きる力を民衆に与えていった。生きる力をもって共に生

きていくことができる社会を作り上げる基となっていく。その背景には今を生きる人々の現実への凝視があり、奥に潜む問題を権力から距離を置いて見据えていたからこそである。

IV. 欲望に向かい合う・・・少欲知足

平成23年3月11日、東北地方太平洋沖地震が起きた。後に名称変更をされた「東日本大地震」である。この地震・津波によって福島原子力発電所が破壊され、今までの震災と異なる被害に包まれることになった。原子力発電問題が未解決のままに停止されていた原子力発電が新たな基準によって次々と稼働し始めている。

豊かさを享受したい人間の欲望は肥大化し、便利さ、合理性、効率の良さを最大の関心事として行動してきた。世界的に見れば資源は次第に枯渇化してきている。人口は爆発的に増加し、いずれ近いうちに食糧難になることは想像できる。国々は競って領地の拡大と経済圏の確保に躍起になっていると同時にナショナリズムが台頭し、自国中心主義的な傾向を見せ始めている。

サステナビリティ、持続可能な社会の構築が叫ばれている。そこには今までの価値観の転換が必要である。経済至上主義、科学万能主義、人間中心主義といった現代人の価値観と異なった価値観が求められる。その役割を担うのが「共生思想」でなければならない。

共生思想の構築には人間のあくなき「欲望」を問うことから始めなければならない。東日本大震災直後に山折哲雄氏と赤坂憲雄氏の対談集が平成23年9月1日に出版された。書名は『反欲望の時代へ～大震災の惨禍を越えて～』である。少し長くなるが、この中の幾つかの文を引いてみる。

山折：豊かさへの、利便性へのわれわれの「欲望」の問題ではないか。果てしない豊かさへの欲望を保証する電力。それを生む原子力発電に、賛成する、あるいは反対する、そのいずれの場合においても、今回の危機的状況を機に、われわれの欲望の問題をどう考えるか。ここにいかないと根本的な議論にはなっていないような気がします。…

「生き残り」戦略というものはすでに政治理論や経済理論の根幹をなしてし

まっているし、われわれの人生観や世界観を方向づけてしまっている。…ところがこの「生き残りたい」という欲望がこれから先、果たして人類を幸せに導くのか。それは破滅と悲劇の道を知らず知らずのうちに歩ませているのではないかという不安が、今度の原発の事故を契機に明らかになったわけですね。今日の問題で言えば、脳死臓器移植の問題がそうだし、環境問題のキーワードになっている「持続可能な開発理論」も同じ穴のむじなだった。…その生き残り戦略は、生き残る者と死にゆく者とのあいだの亀裂と断絶を十分に埋めることができないままに、底しれない不安と緊張の種を人類に与えつづけてきたのではないだろうか。生き残りたいという欲望を残したまま文明の度合いが進めば進むほど、われわれは返って生死の不安と緊張からのがれられなくなっているわけです。(p46 - 47)

このような問題を提起して、最後に次のような提案をしている。

欲望の充足にたいして欲望の贈与、ということを考えるようになりました。そしてまた欲望の譲渡、ということについて想像をめぐらすようになりました。文明のはたらきによって手にしたさまざまな欲望とその果実を、今度は一時的に棚上げして、他者に贈与するという発想です。欲望をいたずらに抑圧するのではない。禁欲のという檻の中に追い込むのでもない。あくまでも一時的に棚上げして第三者の手に渡す。そのための基準と方途を国際的な土俵の中で探っていくという道であります。こうして次に、その第三者に贈与された欲望の集積を、次の世代に譲渡していくという発想であります。…欲望の贈与、欲望の譲渡—ここから新しい世紀の幕が開く

欲望の充足をはかってやまない人間の根源的な欲求を踏まえた上での新たな提言には耳を傾けるところがある。

1912年、南米ウルグアイの元大統領ムヒカ氏は、「国連持続可能な開発会議」で一躍有名になった。2016年4月、日本に来日した際のインタビューに答えた内容の一部と学生に向けて送った彼のメッセージを取り上げる。ここでの彼の発言はこれからの人類にとって、共生という観点からも意味の重い発言をしている。

- ・貧乏とは少しか持っていないことではなく、無限に欲があり、いくらあっても満足しないことです。

- ・ 富の不均衡、あるいは格差をつくった社会的ルールに支配されています。若いひとたちは私たちのこうした愚かな間違いを繰り返えさないでほしいと思います。
- ・ 命、人生ほど大切なものはありません。世界について考える時も、貿易について考える時も、仕事について考える時も、どうやったら幸せになれるのかということから考えないといけない。
- ・ 人生が重荷になるような苦悩に満ちたものになるようなことではいけない。
- ・ 富を求めるあまり絶望してはいけないということです。人生にはもっと大切なことがあります。
- ・ 自分のエゴを満足させるために他者と競って、他者を破壊するような文化であってはいけない。
- ・ お金があまりに好きな人たちは政治の世界から出ていってもらい必要があるのです。彼らは政治の世界では危険です。お金が大好きな人はビジネスや商売のために身を捧げ、富を増やそうとするものです。しかし、政治とは、すべての人の幸福を求める闘いなのです。(その後、政治家は世間の人達と同じレベルの生活をするべきだと言っている。)

そして学生に向かって、「消費主義に支配されるな」、「自分の利己主義を抑えよ」、とメッセージを送っている。

人間の欲望の際限ない増幅は人類の破滅につながる。ナショナリズムは国と国との繋ぎを途絶えさせ、自国中心主義として他国を排除すると同時に他国を実質的に植民地化する動きへと変わっていく危険性を孕んでいる。世界の資産の半数を8人が握っている。年間200万\$の軍事費が使われている。

そういった裏では紛争が続き難民が増え、餓死者が増え続けている。日本では同様に格差が広がり、生活困窮者が増えて来ているし、これからも増大していくであろう。大学生でも5人に1人は奨学金を受けなければ通えないのが現実であり、卒業時には何百万といった負債を抱えて卒業していく。これで果たして幸せといえるのだろうか。ムヒカ氏や山折氏が提言するように、人間の欲望に一度目を向けてみる必要がある。

法然上人は、人間の三大煩惱を踏まえた上で、大欲不喜足を否定し、少欲喜足

の生活を勤めている。自ら持ち得ている能力（例えば財や自分の時間など）を惜しみなく提供していく（山折氏表現を借りるならば、贈与・譲渡していく）、またヒムカ氏表現をすれば、金を中心とする消費生活増大価値観を捨てて、人生の課題に向かって生きていくという生き方の中で、共生社会は形成されていくと言ってよい。

V. おわりに

財をとり合えばいずれ争いを呼ぶ。椅子取りゲームに見られるように1つのものを奪え合えば必ず犠牲者が出る。他人を犠牲にして得る幸せは成り立たない。他人が幸せである社会は安定し生き甲斐を見いだせる。他者の幸せを優先する菩薩の六波羅蜜行の実践はこれからの人類のあり方の姿を示していると受け止めて良い。特に、布施波羅蜜行の実践はいのちの根底を支え合うという点からも、非暴力・アヒンサーに次いで共生社会の重要な具体的実践であり、原理となりうる。

東海学園大学の中核をなすものは仏教精神、法然上人の浄土教を根底に、椎尾弁匡師の提唱する「共生」である。大学の理念をHPでは次のように述べている。

東海学園が一貫として掲げている建学の精神は、仏の御恩に感謝して「打ち込んで生きる」ということであり、それを『勤儉誠実』ということばに集約しています。この勤儉誠実の精神のほかに独自のアイデンティティの基本となる教育の理念として『共生（ともいき）』を掲げています。

本学での「共生」は、本学園の学祖である椎尾弁匡先生が大正期に興された「共生き運動」が原点で、それを継承し、その理念に基づいて人間教育を進めようとするものです。その根本精神は、「こころ生き、身生き、事生き、物も生き、人みな生きる、共生きの家」この先生の歌に表わされています。すべてのものが大宇宙の大なる命に「生かされて生きている」ことを自覚して感謝し、心が生き生きと生きるよう説いています。個人としての生き方のみならず、まわりの物事も同じように生き生きと生きてきます。それはグローバル化した社会を調和させ発展させる生き方であり、異文化がぶつかり合う21世紀の地球社会における大切な規範でもあると思われます。

共生は「仲良し」が集まる社会ではない。時に厳しい対立を抱えながらも人類

の未来を創り上げていく思想であり、社会实践でなければならない。こうした現代的な課題に教育理念としての「共生」が意義を持つには多くの課題を乗り越えていかなければならないであろう。

東海学園の共生文化研究所はこうした課題に何らかの提示を求められて設立された。3年を経過したが未だその方向性も明確ではない。ましてやこうした人類の課題にこたえていくには緻密な研究を可能とし、グローバルな研究を可能にする体制をも構築しなければ、本学園の精神を社会に、世界にアピールできない。それに対応できてこそ、「共生」を中核としている大学といえる。

「共生」の語を用いる大学の学部や大学院の研究科は幾つもある。さらに大学の入学式や卒業式に国公立大学の学長や総長によって「共生」は幾らでも発言されている。それと本学の「共生」との違いを明確にするとともに、仏教、法然、椎尾、そして本学の「共生」がいかに繋がるかをも明確にすることも重要である。また椎尾弁匠師の共生論を核とするならば既に椎尾共生論について出されている批判に真正面からこたえていく姿勢も求められる。

更に言えば、「共生」を精神と据える大学であるのであれば、「共生」の精神に基づいて、教育も、大学運営も為されていなければ「共生」の大学とは言えない。言行一致であってこそ「共生」を教育理念と掲げる大学として社会的に高く評価される大学となっていくであろう。それを期待している。

3年間という短い期間であったが多くの方々の指導助言を得ることが出来た。東海学園大学を去るにあたって、ここに感謝の辞を述べておきたい。

キーワード：共生、平等、人間観、布施、椎尾弁匠

(かみや まさよし 東海学園大学 共生文化研究所 所長：教授)